

第26回 春日井市交響楽団 定期演奏会



2017年 7月2日(日)

春日井市民会館

主催：春日井市交響楽団

後援：春日井市、春日井市教育委員会、（公財）かすがい市民文化財団、中日新聞社、中部大学

ごあいさつ



春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊藤 太

お祝いのことば

涼しげな風鈴の音が聞こえ、夏の訪れを知
るこの頃、第26回春日井市交響楽団定期演奏
会が開催されますことを心からお喜び申し上
げます。

本年で26回を迎える貴団体の本演奏会は、
市民の皆様がクラシック音楽に親しむ機会を
提供するとともに、本市の文化振興の推進に
大きく寄与していただいております。音楽は、演
奏者も、鑑賞者も、誰もが楽しむことが出来
ます。また、多くの楽器が奏でるハーモニーは、ひ
とつの楽器では決して感じることのできない音
の広がりを見せてくれるとともに、人々の心にす
ばらしい感動を与えてくれます。

本市では、文化やスポーツを通し心豊かで
活力あるまちを目指し、本年3月14日に「文化・
スポーツ都市宣言」をいたしました。この宣言
ができたのも、貴団体をはじめとした、多くの市
民の皆様が文化やスポーツの振興にご尽力さ
れているおかげであり、本市としましても、今後
も市民の皆様の活動を支援していく所存であ
ります。

結びに、これからもクラシック音楽を楽しむこ
とのすばらしさを、多くの方に伝えていただくこ
とをお願い申し上げますとともに、出演者の皆
様をはじめ、関係者各位の一層のご活躍を心
からご祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせ
ていただきます。



春日井市交響楽団
会長

中部大学 学長
石原 修

ごあいさつ

第26回春日井市交響楽団定期演奏会にご来
場いただき、誠にありがとうございます。

多くの皆様のご支援、ご協力を賜り、これまでの
歴史の上に今回の定期演奏会の開催があること
を思い、皆様に深く感謝申し上げます。

本日のプログラムは、皆様おなじみの名曲、ヨハ
ン・シュトラウス2世の喜歌劇「こうもり」序曲、プロ
の演奏会でも演奏されることは珍しいボロディン
の交響曲第2番ロ短調、皆様から最も演奏のご
要望が多いドヴォルザークの交響曲第9番ホ短調
「新世界より」の3曲で構成しています。指揮は、
2012年より春日井市交響楽団をご指導いただい
ている井村誠貴先生にお願いしました。また、客
演コンサートマスターには平光真彌さんをお迎え
し、演奏会をさらに盛り上げていただきます。

井村先生を始め、諸先生方の熱意溢れるご指
導により、団員達は演奏技術のレベルを上げ、本
日の演奏会のために一丸となって練習を続けてま
いりました。ステージ上で日頃の練習の成果を存
分に発揮してくれるものと期待しております。どう
ぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

今年3月には、春日井市が「文化・スポーツ都市
宣言」をしました。これからも、春日井市交響楽団
は、音楽を通して市民の皆様とともに春日井市に
おける文化の発展に貢献してまいりたいと考えて
います。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお
願い申し上げます。

プログラム Program

ヨハン・シュトラウス2世:喜歌劇「こうもり」序曲 作品362

Johann Strauss II (1825-1899) "Die Fledermaus" Overture Op.362

ボロディン:交響曲第2番ロ短調

Alexander Borodin (1833-1887) Symphony No.2 in B minor

第1楽章	Allegro
第2楽章 (Scherzo)	Prestissimo
第3楽章	Andante
第4楽章 (Finale)	Allegro

————— 《休 憩》 *Intermission* —————

ドヴォルザーク:交響曲第9番ホ短調「新世界より」 作品95

Antonín Dvořák (1841-1904) Symphony No.9 in E minor "From the New World" Op.95

第1楽章	Adagio
第2楽章	Largo
第3楽章 (Scherzo)	Molto vivace
第4楽章	Allegro con fuoco

指 揮 井 村 誠 貴

演 奏 春日井市交響楽団

本日はお忙しい中、第26回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。昨年は25回という節目の演奏会を開催し、団員一同新たな気持ちで取り組んでいるところです。

今回の演奏会では、こうもり序曲と2曲の交響曲を取り上げました。交響曲は三大交響曲のひとつとされるドヴォルザークの第9番と、プロのオーケストラでもめったに演奏されることのないボロディンの第2番という組み合わせですが、定期演奏会では4回目の共演となる指揮者の井村先生をはじめ、各トレーナーの先生方のご指導の下、約半年間にわたって練習に励んできました。まだまだ発展途上の楽団ではありますが、ここ数年楽団員も増え日々の練習も充実したものとなってきています。今後とも、皆さんに良い音楽をお届けできるよう努めていきますので、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

最後になりますが、当楽団の活動に当たり、日ごろからお力添えをいただいております春日井市、中部大学をはじめとした関係各位の皆様方に深くお礼申し上げます。それでは、最後までごゆっくりお楽しみください。

プロフィール

指揮 井村 誠貴 Masaki Imura



1994年大阪音楽大学コントラバス科を卒業。在学中よりオペラ指揮者として研鑽を積み、これまでにオペラレパートリーも50演目を超える。2013年には、年間オペラ公演回数が日本人第1位に入るなど、その地位を確立している。管弦楽では、京都フィルハーモニー室内合奏団を中心に芸術鑑賞会を全国展開。名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、京都市交響楽団、大阪交響楽団等を客演。また、岐阜県交響楽団等との定期演奏会を客演指揮するなど、アマチュアオーケストラの分野においても貴重な存在となっている。近年はミュージカルにも活動の場を広げ、1999年の「ラ・カージュ・オブ・フォル」を皮切りに、「マイフェアレディ」「レ・ミゼラブル」（いずれも東宝）「ベテン師と詐欺師」「The Musical AIDA」「キャバレー」のロングラン公演全国ツアーを成功させ、ライブCD、DVDを発売。また、岩崎宏美、夏川りみ、ダ・カーポら実

力派シンガーとの共演も多く、コンサートでは軽妙なトークも話題となっている。2010年には京都フィル、湖笛の会（フルート・オーケストラ）と共に韓国光州国際音楽祭に招待され、世界的フルート奏者フィリップ・ピエルロ氏らと共演。クラシックにとらわれない幅広いジャンル、年間200公演近くに及ぶ実績と、繊細且つダイナミックな指揮は、多くのファンを魅了し続けている。現在オーケストラMFI指揮者。関西音楽人のちから「集」代表。2012年より春日井市民第九演奏会音楽監督。

客演コンサートマスター 平光 真彌 Shinya Hiramitsu



愛知県立芸術大学音楽学部卒業。2005年、同大学大学院音楽研究科修了。中村桃子賞受賞。ヴァイオリンを青山泰宏、大久保ナオミ、福本泰之、Ewald Danel、岡山芳子の各氏に師事。指揮を紙谷一衛氏に師事。第11回日本クラシック音楽コンクール大学生の部全国大会第3位。第1回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位。併せて、聴衆賞、オーナー賞も獲得。2007年、2010年及び2012年小淵沢室内楽セミナーにて最優秀カルテットとして「緑の風 音楽賞」受賞。2012年には講師特別賞も同時受賞。これまで、プラハ放送交響楽団等ソリストとして多数のオーケストラと共演。2000年から岐阜管弦楽団、2004年から愛知室内オーケストラのコンサートマスターを務めるほか、神戸室内合奏団、中部フィルハーモニー交響楽団などの客演コンサートマスターを務める。その他、ソロ、室内楽の分野でも中部地方を中心とし、積極的に演奏活動を行って

おり、クラシック音楽を親しみやすくより身近に感じてもらうために、サロンコンサートを精力的に行い地域に根ざした音楽活動を展開している。愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学非常勤講師。

春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

春日井市交響楽団は1990年に創設され、市民の音楽愛好家を中心に「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」としての活動をずっと続けております。団員は、会社員・公務員・医師・教員・主婦・学生・自営業者などからなる約60名で、日曜日、西尾町にある「ハーモニー春日井」のホールで練習しています。ここのホールは大変響きがよく、冷暖房も完備という素晴らしい環境で、市内はもとより市外からも多くの団員が楽器を背負って集まってきました。プロの指揮者やトレーナーの先生に来て頂き、時には楽しく時には厳しく練習に取り組んでいます。

プログラムノート

喜歌劇「こうもり」序曲

ヨハン・シュトラウス2世は、数々の有名なワルツ曲を作曲し「ワルツ王」として知られているが、優れたオペレッタ(喜歌劇)も作曲しており「オペレッタの王様」とも呼ばれている。中でも喜歌劇「こうもり」は、オペレッタの最高峰と評価されている。

物語の主人公アイゼンシュタインは、役人を殴った罪により刑務所に入る事となるが、友人ファルケ博士に誘われ仮面舞踏会に行ってしまう。一方主人公の妻ロザリンデも、元恋人のアルフレートに言い寄られこっそりと舞踏会に出席する。舞踏会の後刑務所に出頭した主人公は、アルフレートと一緒にいるロザリンデを見て詰め寄るが、逆に舞踏会で別の女性(実は変装していたロザリンデ)と遊んでいたことを指摘され大騒ぎとなる。

作品名の「こうもり」は、ファルケ博士が舞踏会でこうもりの仮装をしていたことに由来し、事の全ては彼が仕組んだ芝居であった。

今回演奏する序曲では、主人公が刑務所に向かう際の鐘の音、嬉しい夫の不在をあたかも悲しいように装うロザリンデの「ウソ泣き」を表すオーボエソロ、舞踏会のワルツなどが登場し、オペレッタ全体のストーリーが凝縮されている。これら急激に変化するメロディに注目しながら曲をお楽しみ頂きたい。

(Vn. 浜田逸平)

交響曲第2番 短調

アレクサンドル・ボロディンは同時代に生きた人々から「独創的な作曲家」「第一級の化学者」「女子医学学校の創立者」などと呼ばれていたが、彼自身は「日曜作曲家」と自称していた。実際、ボロディンの本業はロシア・ヨーロッパの第一線で活躍した化学者であった。

ボロディンが活躍した時代のロシアでは、民族意識が高まりつつあった。彼はロシア民族の音楽を作り上げるために歴史を研究し、オーケストラの楽器も自ら演奏し研究した。今回演奏する交響曲第2番について、作曲者自身は「(第3楽章では)吟遊詩人の形象を描き出し、第1楽章ではロシアの勇者たちの集まりを、フィナーレでは大勢の民衆の歓喜に包まれゲースリ(ロシアの吟遊詩人の弦楽器)が奏でられる勇者たちの酒宴の場面を描きたい」と語っている。

第1楽章

冒頭の弦楽器による勇壮な第一主題(勇者のテーマ)とチェロで始まる抒情的な第二主題(ロシア民謡のテーマ)が対照的に演奏され、音楽が進むにつれて第二主題は勇敢・毅然になっていき、最終的に第一主題に合わさっていく。オーケストラ全体の力強い斉奏(ユニゾン)により第1楽章は幕を閉じる。

第2楽章(Scherzo)

規則正しい疾走感のあるリズムの上にメロディが軽やかに重なっていく。中間部で木管楽器により東洋的で優雅なメロディが奏でられるが、また疾走感のあるリズムが舞い戻ってくる。上昇・下降を繰り返し音楽は再び盛り上がり、静かなハーモニーで収束する。

第3楽章

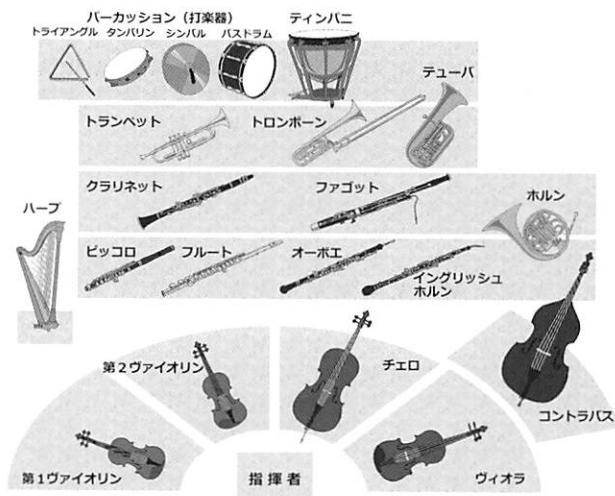
ハープ、クラリネット、ホルンにより静かに吟遊詩人の語りが始まる。様々な楽器が重なっていき、静かだった語りは重みを増していき。冒頭の吟遊詩人のテーマがオーケストラ全体によってゆったりと厳かに奏でられ、再び静かな語りへと戻っていく。その後、途切れることなく第4楽章へ向かう。

第4楽章(Finale)

序奏の後、民衆が陽気に踊るような民族的なメロディが始まる。オーケストラの楽器がロシアの民族楽器を模倣し、木管楽器が挨拶をするように少しずつ現れては消える。途中、トロンボーン、チューバの力強い斉奏(ユニゾン)が第1楽章の「勇者」を想起させる。第4楽章では同じメロディが楽器やハーモニーやリズムを変えながら何度も登場する。色彩豊かな歓喜の踊りの中で交響曲はフィナーレを迎える。

(Hr. 加藤杏奈)

楽器配置図 (ボロディン: 交響曲第2番)



交響曲第9番ホ短調「新世界より」

ドヴォルザークはチェコの片田舎の宿屋・肉屋の息子として生まれ、音楽好きな父親の影響を受けてヴァイオリンやオルガンを学んだ。オルガン学校卒業後は管弦楽団でヴィオラ奏者として活動していたが、チェコ音楽の創始者であるスメタナと出会い、作曲の指導を受けてから、オペラや交響曲などを数多く生み出した。そして、プラハ音楽院の作曲学校の校長として後進指導にもあたっている時に、ニューヨークナショナル音楽院の創始者サーバー夫人の強い熱意とプラハ音楽院をはるかに上回る給料に根負けし、ニューヨークナショナル音楽院の校長に就任する。

交響曲第9番は渡米後およそ半年で作曲され、旧態依然とした祖国チェコとは違う民主主義的で自由な生活や、黒人の学生から学んだ黒人霊歌など、アメリカ精神の影響を受けている。表題の「新世界」とはアメリカのことである。しかし、ドヴォルザークはアメリカ音楽を書いたわけではなく、「アメリカ精神を元に各テーマを様々な楽器で繰り返すヨーロッパ的な音楽を交響曲第9番として作曲した。

第1楽章

生まれ故郷に思いを馳せるようなチェロの深い寂し気な旋律で始まり、その後フルートとオーボエがその旋律を奏でる。静寂から突然、弦楽器と木管楽器が交互に現れ、ホルンの揚々とした第一主題から主要部が始まり、繰り返しながら盛り上がっていき、次にフルートとオーボエが中間主題を奏でる。第2ヴァイオリンがこの旋律を繰り返し、その後フルートが第二主題を奏でる。この第二主題は黒人霊歌の「静かに揺れよ、愛しい幌馬車」に似ているとも言われている。各主題がまた再現部で繰り返され、第1楽章が終結する。

第2楽章

冒頭と終盤の重厚なコラールを中低音の管楽器が演奏している。最低音のチューバがこのコラール部分にのみ登場する。そして、誰もが耳にしたことのある「家路」の旋律をイングリッシュホルンが朗々と歌いあげ、フルートとオーボエの軽快な旋律へと続く。その後、コントラバスのピチカートの上でクラリネットがやや寂し気な旋律を奏でる。またイングリッシュホルンの旋律へ戻り、今度は弦楽四重奏がその旋律を憧憬豊かに奏で、コラールへと続き、最後はコントラバスの和音で終結する。

第3楽章(Scherzo)

木管楽器、ティンパニ、トライアングルの活気あるリズムから始まり、低弦の刻みのリズムの上に木管楽器の主旋律が輪唱しているかのように重なる。繰り返しながら楽器が増えていき、また最初に戻る。中間部ではオーボエとフルートの牧歌的な旋律が様々な

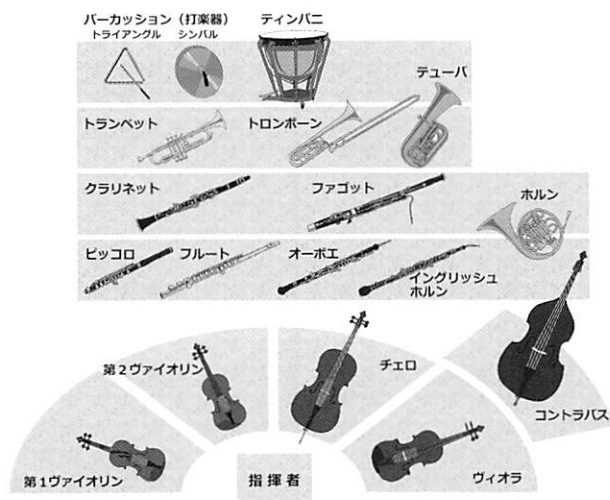
楽器で繰り返され、軽快な踊りの旋律へ移っていく。この楽章は民族的な旋律が多く、アメリカの先住民族の結婚式の曲などの様々な解釈がある。そして、第1楽章の第一主題をホルン、第二主題をトランペットが奏でて第4楽章へと続く。

第4楽章

弦楽器の何かが飛び出してくるような強烈な前奏から始まる。ホルンとトランペットが第一主題を堂々と演奏し、ヴァイオリンが「汽車が走行する音」のような三連符の旋律を力強く奏でる。この交響曲で唯一となるシンバルの音が静かに響き渡った後、ファゴットとチェロの三連符の旋律が終わり、クラリネットが静かに第二主題を奏でる。そして第1楽章から第3楽章までの各主題が何度も引用され、最後にホルンによって第一主題が再現されトロンボーンが重なり第2楽章の和音が再現される。更に木管楽器が増え第一主題が繰り返され盛り上がり、最後は管楽器のハーモニーで静かに締めくくられる。

(Fig. 大竹佳乃)

楽器配置図 (ドヴォルザーク: 交響曲第9番)



楽章ごとの聴きどころ

- 第1楽章：ホルンから始まる揚々としたメロディと木管の穏やかなメロディ。第二主題は黒人霊歌に影響を受けたと言われる。
- 第2楽章：イングリッシュホルンにより、この交響曲で最も有名なメロディが奏でられる。
- 第3楽章：トライアングルが印象的な活気ある楽章。
- 第4楽章：弦楽器の冒頭、それに続くトランペット、ホルンのメロディが力強く演奏される。

表紙デザイン 加藤杏奈